

ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版 ⑪

2023年05月18日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(32)

軍政打倒へPDFへの市民の密かな支援拡大 西方 浩実

11月11日。PDF（国民防衛隊）が、本格的にヤンゴンで動き始めたみたい」。そう聞いたのは、2週間ほど前のこと。一見落ち着きを取り戻していたヤンゴン市内で、爆発や銃撃がまた増え始めていた。

PDFは、事前にFacebookページで「これからしばらくは治安が悪くなるから警察署や役所には近づかないように」などとアナウンスを出していた。今までにもそういう発表は何度かあったから、あまり気にしないようにしていたのだけれど、ヤンゴン市内では明らかに警察や兵士のチェックポイントが増えたように感じる。

善良な外国人（自称）である私は、彼らにアレコレ絡まれることはない。でも軍のチェックポイントを通りかかると、カバンの中を見せろと呼び止められたり、夜だと無言のまま懐中電灯で全身を照らされたりして、不愉快極まりない。何ら後ろ暗いことはないのだから、と虚勢を張って、あえて余裕のある態度で接したりするのだが、銃を持った迷彩服の兵士と至近距離で向かい合う間、実は心臓バクバクだ。

だが、警察や兵士の厳重な警備にもかかわらず、PDFの攻撃は止まない。しかも、ヤンゴン国際空港やアメリカ大使館など、警察や兵士がウヨウヨしている場所の近くでも、あるいは、早朝や夜間ではなく真昼間にも、そういう事件が起きるようになった。

「明日は11月11日、ゾロ目の日。何か起きるかも・・・って噂は聞くけど、わからない」。友人はそう言って、不安半分、期待半分、という表情をする。

「昨日、また近所でPDFがダラン（軍への情報提供者）を殺したよ」。そう話す同僚に、それって怖い？嬉しい？と聞いてみる。彼は、少し考えてから答える。「うーん、半々だな。近所でこういうこと



市民の手による、PDFへの支援物資の詰め合わせ。おしぼり、タバコ、おやつ、鎮痛剤、消毒液、コーヒーパウダー……。考えうる限りの「あったらいいかな」を詰め合わせた、市民の精一杯の応援だ。

が起きると、警察とか兵士が夜中に周辺の家を調べて回るから、それは怖い。こういうことがあった後はナーバスになってしまって、犬が吠えただけでも、兵士が来たかと思って目がさめるんだ」

「だけど」と彼はニッと笑う。「ダランが殺されたってことは、自分の地域の安全を、自分たちで守ったってことだろう？そのダランのせいで、逮捕されたり殺されたりした人もいるけど、これで『やられっぱなしじゃないぞ』ってことを見せつけることができた。自分の地域を、誇らしく思うよ」

私が住んでいる地域でも一時期、たびたび警察車両がやってきては、地域住民を連行していた。近所に住むおじさんは、こう言って憤っていた。「あの家で鍋を叩いている、とか、あの家にCDMの参加者がいる、とか、ダランが密告するんだよ。誰がダランかみんな知ってる。でも後ろに軍がいるから、下手に手は出せない」

別の友人は、こう言っていた。「ダランの中には、地域の住民たちが『軍に情報提供しないでくれ』と

頼んでも『殺されても知らないぞ』と脅しても、密告を続ける人がいる。だから市民の中には、地域住民の安全を守るために『あのダランを攻撃してほしい』と PDF に依頼する人もいた。PDF はその人が本当にダランか、いろんな人に聞いて調べる。絶対に間違えちゃいけないからね。PDF は殺人という苦しい仕事を引き受けて、市民の安全を守ってくれているんだよ。」

だから人々も、PDF を守る。友達の家には、もし PDF が彼女の家に逃げ込んできたらずぐに渡せるようにと、救急箱が準備されていた。抗生物質や痛み止め、栄養剤、包帯などがぎっしりと詰まったセットが5つ、台所に隠してある。もし PDF が逃げ込んできたなら、彼女は命がけでかくまうだろう。こういう人は、決して少数派ではない。反軍政のもとに、市民はひとつのチームになり、結束する。これが市民の強さだ。

11月10日、ヤンゴン郊外で起きた爆発。以前は、早朝や夜などに起きることが多かったが、今はいつでも何かが起こりうる。

なお PDF による攻撃は、軍政下にある警察署や役所などの公的施設が標的になることがほとんどだ。

(Myanmar Now より)

ヤンゴンの路上でお喋りする兵士と警官。こうした路上のチェックポイントでは、いかにも下っ端の若い兵士が、道行く車を止めては、おざなりにライトで後部座席の足元を照らし、ダッシュボードやトランクを開けさせたりしている。チェックが終わり「チェーズーバー（ありがとう）」などと言われると、ごく普通の青年に見えて、少し戸惑う。

(Myanmar Now より)

最近変わったことは、ほかにもある。例えば、経済政策。軍からは相変わらず一方的に、いろんな通達が出されている。先日はとつぜん、現金での物の売買が2000万チャット（約128万円）までに制限された。分割払いなどという仕組みがほとんどないミャンマーでは、車だろうが家だろうが、現金一括。上限額が設定されると、当然こうしたものの売買が止まる。

友人たちは冗談を言って笑いあった。「もし今の状況で家を買うなら、パーツごとに契約しないとね。トイレはいくら、台所はいくら、リビングはいくら、

廊下を買い忘れた！みたいなことになったりしてね」。こうして笑い飛ばしつつ、理不尽な現状を飲み込んで進んでいくミャンマーの人たちは、本当にたくましくて眩しい。

しかし、笑い飛ばせないこともある。銀行に行くたびに疲れ果てて帰ってくるのは、経理担当の同僚だ。彼女は、銀行の窓口がすっかり軍政スタイルに戻ってしまった、と嘆く。

「たとえば、銀行に残高照会をしに行くとするでしょ。すごく簡単なことなのに、窓口でお願いすると『今日は忙しいから明日また来い』と言われるの。仕方なく通帳に1000チャット札（約65円）はさんで渡すと、すぐに照会してくれる」

クーデター前の NLD (国民民主連盟) 政権の時は、そういうのはなかったの？と聞くと、彼女は、ない！と首を振った。「NLD 政権下では、賄賂を要求する公務員を市民が通報できる窓口があったんだよ。だから公務員は罰されるのを恐れて、賄賂を要求しなくなったの。NLD のときは、本当によかった」

そんな彼女に昨日、再び「ちょっと聞いて」と呼びかけられた。「さっき今月の事業費をおろしに銀行に行ったら、窓口の係員が『服を買わない？』と持ちかけてきたの。銀行員だけど、個人のビジネスとして服を売っているわけ。何人かのお客さんは、その銀行員との関係を良好に保つために、服を買ってあげた。でも私は『昨日買ったばかりなので、すみません』と丁重にお断りしたの。そしたら、どうなったと思う？・・・私が引き出した2000万チャット（約128万円）は、全部1000チャット札（1枚約65円）で出されたの。服を買った人は、みんな1万チャット（1枚約650円）で受け取っていた。私だけ、1000チャット札を2万枚も抱えて・・・どれだけ重たかったか。」

彼女の口調は怒っていたけれど、その表情は傷ついているように見えた。子どもじみた嫌がらせに、文句の一つも言わずに、黙って従わなければならない。文句など言おうものなら、次回からは1チャットも引き出せないかもしれないのだから。きっと彼女は、2万枚の紙幣を前に途方に暮れながら、それでも笑顔で「ありがとう」と言ったのだろう。悔しかったと思う。軍政下で腐敗していく社会の中で、こうして人々は自尊心を傷つけられていくのだろう。

しかし、それでも人々は胸を張っている。彼女は言う。「どんなにひどい扱いを受けても、私たちは間違っていない」。そこにいささかの揺らぎもない。そして人々には、何を未来に残し、何を残すべきではないか、すでに明確な答えが見えている。その答えにたどり着く道のりは、まだ判然としないけれど、

現在地と目的地がわかっているのだから、必ずたどり着くはずだ。

「軍が倒れるまでどのくらいかかるかな」と私がつぶやくと、彼女は「さあ・・・」と首をかしげたあと、こう言って笑った。「わからないけど、今はその日がくることだけが楽しみだよ。」

2023年05月21日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(33)

ササガワ来る、日本への失望高まる

西方 浩実

11月26日。「日本も、ほかの外国もアテにしない。もういいんだ。僕たちは自分たちでなんとかする」。ある友人から初めてハッキリとそう言われたのは、確か6月頃だったと思う。彼はその後も、例えば9月のD-dayの宣言のあとなどに電話をかけてきては「君たち日本人にわかってもらえなくてもいい。これは僕らの問題だ」と繰り返した。そのわりに「君は僕たちが武力で反撃することについて、どう思う？」と私に尋ね、私の回答が曖昧だったりすると「どういうこと？もう一回言って」とそのニュアンスまでも正確に聞きたがるのだった。

わかってもらえなくていい。でも、わかってほしい。

彼の心の中で揺れるアンビバレントな感情が見えるようで、切なかった。

先日、その彼がまた電話をかけてきた。「ササガワが来たね・・・僕たちはとてもガッカリしたよ」。そうだよ、と返す。日本・ミャンマー関係の要人である日本財団の笹川陽平氏が、クーデターを起こした張本人ミンアウンフライン国軍総司令官と直接会談をしたのだ。これは、ミャンマーの人々に「日本が軍政を正式な対話の相手として認めた」という強い印象を残した。

彼は私に聞いた。「君は、ミャンマーで最も影響力が強い人は誰だと思う？」「アウンサンスーチー」と私が答えると、彼はこう言った。「そうだ。僕らミャンマー市民は、ミンアウンフラインには絶対に従わない。僕らを動かせるのはアウンサンスーチー氏であり、NUG(民主派の亡命政府)だ。日本がミヤ

ンマー市民の気持ちをわかっているなら、ミンアウンフライン(国軍総司令官)だけに会うなんて、ありえない」

私は、日本政府が軍政を認めたわけではないのだと説明した。ついでに「あれはササガワ氏の個人的な訪問なんだから」と、外務省発表の逃げ口上を伝え、彼は「そうか」と相槌をうった。けれどももちろん、彼も私も全然そう思っていなかった。

「Facebookには、ササガワや日本に失望したという投稿が溢れているよ。僕は今、日系企業で働いているけれど、もし今後、日本の会社で働くことが軍政側だと見なされるようになったら、今の仕事をやめる。僕は軍政を認めていないのに、軍政を認めるような国から給料をもらうのは矛盾しているから」。2つの立場に同時に立つことはできないんだ、と彼は繰り返した。

それから、思い出したように私に尋ねた。「アメリカ人ジャーナリストの話、聞いた？」うん、聞いたよ、と頷く。5月に軍に逮捕された、ミャンマー現地メディアの編集長、ダニー・フェンスター氏のことだ。ササガワ氏に来る3日ほど前に、軍政はフェンスター氏に禁錮11年という重い有罪判決を出した。そしてササガワ氏との面会のあと「ササガワ氏(など)に要求されたから」と、禁錮11年だったはずのフェンスター氏をとつぜん解放したのだ。

友人は怒気をはらんだ声でこう言った。「ミャンマー人のジャーナリストだって、同じ人間なんだ」。ああ、その通りだ、と思った。国連も諸外国も、クーデターを起こした軍を批判し、「ミャンマーの人々

の命や人権を守るように」と繰り返し声明を出している。でもそうした国々が、お金や政治力を使って救い出そうとするのは、自国民や外国人だけなのだ。1万人を超えるミャンマーの「政治犯」のことなど、誰も助けてくれはしない。こうしたひとつひとつの出来事の積み重ねが、彼らに「外国に頼らず、自分たちで闘う」と決意させてきたのだろう。

電話を切る前に、彼はこう言った。「君は、今のミャンマーの不条理に、僕らと一緒に怒っている。でも、君には僕たちの気持ちを本当に理解することはできないよ。自由で、お金持ちで、人権の守られた国で育った君には、絶対にわからない。…でも、わかろうとしてくれてありがとう」

ヤンゴンでは、ますます緊張が高まっている、という。確かに、先週あちこちで爆発が起きた日、NUGは「これから拡大する軍事作戦の一部だ」と警告を発していた。警戒感を強めた軍は、連日のように若者を何十人も拘束しているという。

ところが、私は正直、その緊迫感をあまり感じていなかった。警察や兵士、軍車両を見かける回数が増えた感じもないし、軍のチェックポイントに至っては減った気さえする。「あんまり軍の警戒感とか感じないんだけどなあ」と漏らすと、同僚は「気づいていないだけだよ」と微笑んだ。

「いろんな道の角に、警官が立っているよ。普段着だね」。えっ、そうなの？普段着なのにどうして警官だと分かるの？「わかるよ。どこかに行くでも

ない、誰と話すでもない。肩から小さなバッグをかけて、ただそこに立って、あたりを見回してる。髪型も角刈りで、いかにも警官って感じた。」

別の同僚も、話に入ってくる。「そういえば、この近くのチェックポイント、最近なくなったでしょ。でも、本当はなくなっていないの」。えっ、とまた驚く私に、彼女はいたずらっぽく言った。「チェックポイントがあった場所の脇に、竹やぶがあるでしょ？竹やぶの奥をよく見てごらん。警察が数人スタンバイしてるよ」。

街から、警察や兵士の姿は消えていく。チェックポイントも減ったように見える。だけど彼らは、そこにいるのだ。道の角で、竹やぶの向こうで、畏にかかる獲物を待つように。冷たいものを感じる。

同僚たちは、今のところあのエリアが一番安全だとか、私の住むエリアは、西側はいいけど東側は気をつけたほうが良いとか、あれこれ情報を教えてくれた。「コイツの家は危険ゾーンだから近づいちゃダメ」などと冗談めかして笑う彼らは、話の内容を知らなければ、ワイワイと楽しそうですらある。

私も一緒になってワイワイやりながら「こんな大変なのに、みんな強いよねえ」と言う。同僚は、わかってないなあ、というように、また笑った。「僕らは強いんじゃない。強くあろうとしているんだよ。」

2023年05月26日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(34)

Freedom from Fear

西方 浩実

12月11日。ヤンゴンの片隅で声を上げた若者たちが、軍に轢き殺された。逃げまどう若者に、冷酷なスピードで突っ込む軍の車。瞬間、音もなく転がる細い身体。友人から送られてきた動画を見ながら、えっ、うそ！と叫んだ。心臓が嫌な感じに波打った。吐き気がする。クーデター後、もう何百回この吐き気を味わっただろう。どうして・・・どうして、こんな惨いことができるのだ・・・。

その後、若者たちが掲げていた横断幕に【FREEDOM FROM FEAR】と書かれていたことを知った。アウンサンスーチー氏の言葉だ。『私たちをとじこめる監獄は、自分の中にある恐怖心。その恐怖心から自分を解き放つことこそ、本当の自由』。

ああ、と思わず顔を覆った。彼らが掲げていたのは、軍を攻撃するメッセージではない。軍政への批判ですらない。彼らは、ただ多くの人々に訴えてい

たのだ。恐れるな、自由であれ、と。

彼らが手にしていたのは、銃ではなく、花だった。

その日の午後、すでにその虐殺の映像が拡散されていたにもかかわらず、ヤンゴン各地でゲリラ的な抗議デモが続けられた。夜8時には、鍋の音。軍に人生を奪われ続けた人たちが、命がけで叫んでいる。

Freedom from Fear.

市民によるミャンマープラザ（市内で最大規模のショッピングモール）のボイコットも続いている。2週間ほど前に、ミャンマープラザの中で横断幕を掲げて抗議の声を上げた若者を、警備員が暴力的に取り押さえたからだ。その日のうちに、ボイコットを呼びかける投稿がFacebookに溢れた。

ミャンマープラザはすぐに謝罪のコメントを出し、警備員をクビにした。あれは提携していた民間警備会社なのだと説明し、自分たちは民主側だとまで言った。それでも人々はボイコットを続け、多くの店が営業を中止している。

なんだかミャンマープラザがかわいそう・・・という気分になっていた私に、友人は「それでも私は行かない」と断言した。「ミャンマープラザが嫌いなわけじゃないよ。彼らが2月に、警察に追われたデモ隊をかくまってくれたことを、私たちは覚えている。だけど大事なものは、軍政に加担することは絶対に許されない、と示すことなの。」

またある友人はこう言った。「僕らには、思ったことを口にする自由があるはず。軍政は嫌だ、と言う権利があるはずなんだ。それが暴力で封じられたということに、僕たちは抵抗しなきゃいけない。ミャンマープラザはお金のためのビジネスだけど、僕らは人権のために戦っているんだよ。」

タクシーの運転手も、得意げに話してくれた。「僕たちもボイコット中だよ。お客さんの行き先がミャンマープラザだったら、ごめん、行けないよ、って断るんだ。Grab（配車アプリ）でミャンマープラザに呼ばれたときも、すぐにキャンセルしてる。」

軍は、ミャンマープラザの店舗オーナーたちを呼び寄せて、店を開くように命令した。そのニュースを聞いて、友人は笑った。「オーナーに命令して店を開けさせることはできても、私たちに命令して買い物に行かせることはできないわよ。」

国家や法律を思いのままに変えることはできても、

人々や社会を思い通りに操ることなどできない。彼らはそれを証明し続けているのだ。

「ミャンマープラザのボイコットは驚かなかったけど、鍋叩きが再開したのは正直驚いたな」と、同僚は言った。デモ隊が無残に轢き殺されたあの日の夜から、ヤンゴンの一部では、再び夜8時に鍋の音が聞こえてくるようになっていた。

「最近では、誰がどこで見ているかわからないだろう？ダラン（軍への情報提供者）もいるし、私服警官もいる。だから僕らは、道端でのおしゃべりにも気をつけなきゃいけない。そういう点では、ボイコットは簡単だよ。買い物に行く先は個人の自由だから、ミャンマープラザに行くのをやめたところで、誰に咎められることもない。でも、鍋叩きは違う。明らかな反軍政の行為だ。しかも、音の発信源で家がバレる。これはすごく勇気のいることだよ」

友人の話によると、その日、『鍋叩きをやろう』という事前の呼びかけはなかったそうだ。軍の蛮行に怒った誰かが最初に鍋を叩き始め、周囲がそれに共鳴した。最初は、ほんの数ヶ所で。翌日はそれが、ヤンゴン全体にまばらに広がった。以前のような、街中が鍋の音で覆われるような壮大なスケールではない。とても小規模で、散発的な鍋叩き。

それでも、それは確かに「Freedom from Fear」のメッセージだった。だれかが命がけで発信し、だれかがそれを受け取り、まただれかに伝えていく。

アウンサンスーチー氏には、禁固2年が課された（注。いちど禁固4年の有罪判決が課されたあと、2年に減刑されたんだよ、と私に説明しながら、同僚たちは笑う。「軍は、私たちが『やったー、50%オフ!』と喜んで、軍に感謝するとでも思っているのよ。どうせこれから他にもいくつも濡れ衣を着せて、どんどん刑期を延ばすくせにね」。同僚の一人が笑いながら叫ぶ。「軍に感謝なんて絶対しないからねー!」

アウンサンスーチー氏の判決について、国内でのリアクションは薄かった。有罪判決が出ることはわかりきっていたからだ。「アウンサンスーチー氏を無罪に!」などという無意味なアクションは起こらなかったし、判決後に市民が怒りのデモをする、みたいなことにもならなかった。「興味ないよ」とはっきり言う人もいた。

友人は、淡々とこう言った。「たとえ何百年の刑が課されても、僕らがやるべきことは同じなんだ。僕たちは民主化を目指して戦う。軍が倒れば、彼女は助かる。それだけだよ」

友達が以前、アウンサンスーチー氏について、こんな風に話すのを聞いたことがある。「昨年11月の選挙で圧勝したあと、彼女は自分が軍に捕まることを覚悟していたんじゃないかな。もしかしたら、殺されるかもしれないことも。そういうリスクを覚悟の上で、それでも選挙はやり直さない、と正義を貫いたんじゃないかな」

もしそうだとしたら、それはまさに Freedom from Fear だ。この国の誰もがスーチーさんを支持しているわけではない。でも彼女のこの言葉は、ミャンマー市民の心にしっかりと深く根を張っている。

注・2021年12月6日、軍が設置した特別法廷は、アウンサンスーチー氏に対する非公開の秘密裁判で、社会的不安をあおったなどの罪で禁固4年の有罪判決を言い渡した。しかし判決直後、ミンアウンフライン国軍総司令官は、2年減刑の恩赦を与えた。その後もアウンサンスーチー氏は、密輸された無線機の所持や、新型コロナウイルス対策法の違反、賄賂の受け取りなどで、2022年6月までに計11年の刑期が課されている。さらに、他にも選挙不正や国家機密法違反など多くの罪に問われており、すべて有罪になれば刑期は100年を超える。一連の裁判は、国連やNGOなどから不公正だと批判されているが、軍は正当な裁判だと主張している。なおアウンサンスーチー氏はすべての罪状を否認している。

2023年06月01日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い (35)

アウンサンスーチー氏への思い

西方 浩実

12月27日。「今年は、つらいクリスマスになってしまったわね」。クリスマスのあと、久しぶりにクリスチャンの知人を訪ねると、その初老の女性はそう言って微笑んだ。そしてその表情のまま、じわっと涙を浮かべた。

地方での軍の攻撃は、12月に入り、残虐さを増した。無差別に街や村を空爆したかと思えば、民間人を拷問し、焼き殺す。「本当に、軍の非道さと言ったら……。あんな残酷な兵士たちを相手に戦う若者たちが、本当にかわいそうで……。」彼女は途切れ途切れにそうつぶやく。夜眠れない日もあるのだといい、毎日ただ祈ることしかできない、と嘆いた。

現在の戦闘状態を、彼女は望んでいないのだろう。そう思いつつ、私は小声で無遠慮な質問をした。「軍政が続くのと、内戦状態が続くのと、どちらがマシですか?」。彼女は涙を浮かべたまま、きっぱりと言った。「軍政は絶対に受け入れられない。私は、PDF(国民防衛隊)がヤンゴンに攻め入ってくる日を待っているのよ」。

30代の友人は、すこし複雑な表情を浮かべながら、こんな話をし始めた。「もしも仮に、今、アウンサンスーチー氏が軍から解放されて、僕らに『武器を手放しなさい』と言ったとしても、きっと誰も従わないだろう。この戦いは彼女でさえ止められないんだ」。

アウンサンスーチー氏は武力行使に反対するかな?と聞くと、彼は「わからない」と答えた。「僕たちは最初、平和に行動した。君も見ていた通りだよ。銃で撃たれても、暴行や拷問をされても、僕らはギリギリまで耐えたんだ。それから、どうしようもなくなって銃をとった。でもその苦悩の過程を、彼女は見ていない。非暴力闘争でノーベル平和賞をとった彼女が、僕らと一緒に武力で戦ってくれるかどうか、僕にはわからないよ」

そして彼は、思いもなかったことを口にした。「軍は、長引く戦闘を終わらせるために、最終手段としてアウンサンスーチー氏を使うかもしれない。つまり彼女をメディアに出して『戦闘はやめなさい』と言わせるんだ」。えーっ、そんなことあり得るか

なあ、と疑わしげな私に、彼は「わからない。でも軍はいつだってそういう卑怯な手を使ってきた」と、吐き捨てるように言った。

「僕が心配しているのは、そうなった時の、僕たちとアウンサンスーチー氏との信頼関係だ。多くの国民は、僕も含めて、彼女を信頼し、尊敬している。でも武力闘争をやめろと言われたら、それに関しては彼女に従うことはできない。僕らにとって、彼女を悲しませるのはつらいことだよ」。

それから、彼は少し声を強めてこう言った。「でも、僕らはアウンサンスーチー氏のために戦っているんじゃない。自分と子どもたちの未来のために戦っている。だから彼女と気持ちが違ってても、それは仕方ないんだ」。そういう心配をしている人はあなただけ？と聞くと、「僕の他にもたくさんいると思うよ」と彼は答えた。

彼の苦悩について同僚に話すと、彼女はこんな風に言った。「軍が本当にアウンサンスーチー氏を利用するかどうかはさておいて、彼女は今のミャンマーの状況を理解してくれると思うよ」。そして昨年選挙の前、アウンサンスーチー氏がテレビのインタビューに答えたときの話をしてくれた。

インタビュアーは、こんな質問をしたそうだ。「もしまた今あなたが逮捕されたら、ミャンマーはどうなると思いますか？」。彼女の記憶によれば、アウンサンスーチー氏はこんな風に答えたという。「民主化して以降、ミャンマー国民は民主主義の中で呼吸をしてきました。民主主義を咀嚼し、飲み込み、身体に染み込ませてきたのです。それまでの軍政との違いも、国民は十分わかっているはず。たとえ私が逮捕されても、ミャンマーは大丈夫です」

「彼女は私たちの選択を信じるはず」と、同僚は私の目を見つめて言った。それから、思い出したように付け加えた。「選挙前、彼女はこんなことも言っていたわ。『もし選挙で国民が NLD (アウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟) を支持すれば、NLD は生き残る。もし支持しないなら、NLD は敗れる。それが民主主義です』って。民主主義の国では、私たち自身が、未来を実現する手段を選べるはずだよ」。

2015 年から始まった NLD 政権には、実は批判も多かった。あるビルマ族の知人は、はっきりと言った。

「NLD 政権の実力は、正直たいしたことなかったよ。NLD の政治家たちにも、この人はすごい！と思えるような人はいなかった」

しかし、それは仕方なかったのだ、と彼は続けた。

「NLD の政治家には、かつて民主化運動に身を投じたせいで、10 年も 20 年も刑務所に入っていた人が結構いるんだ。そういう人たちがいきなり実務能力や国際感覚を身につけて、バリバリ実績を上げるなんて無理でしょう。だけどそういう人たちは、長年苦しい思いをしても民主主義を諦めず、軟禁中のアウンサンスーチー氏と心をつなげて耐えてきた。彼女はそれに報いたんだよ」

それだけじゃないと思うなあ、と別の友人。「2015 年の政権に何より必要だったのは、個人の能力や実力じゃなかったんだよ。それより、国軍とは何かを知っている人。つまり、民主化されてもなお大きな政治力を持っていた軍に対して、憎しみを態度に出さずに笑顔で握手できる人だ。2008 年憲法がある限り、どんな政権でも簡単に軍にひっくり返されてしまうからね。軍の機嫌を損ねるとどうなるかわかっている人こそ、適任だったと思うよ」

それでも、2 期目になれば、また潮目が変わる。少なくとも、そのはずだった。友人によれば、次の 5 年で NLD 政権は、たとえば Dr. Sasa のように、カリスマ性や実績のある若者や留学経験のある人たちの登用しようとしていたのだという。「アウンサンスーチー氏は NLD 政権の最初の 5 年間 (2015〜2020 年) で、本当に国をつくる力のある人を見定めてきたんじゃないかな。つまり、これまでの 5 年間は、NLD にとっては布石。これからが本番だったんだ」

突然奪われた未来を取り返そうと、必死に闘いつづけたミャンマーの 11 ヶ月。失われたものの大きさは、想像を絶する。それでもミャンマーの人々の不屈の闘志と、自由への意志に、私は何度でも希望を見出す。2022 年、どうかミャンマーの未来に光が射しますように。